

## 静謐な戦時下の青春

松本侑壬子・ジャーナリスト

黒木監督の遺作となった本作は、前作『父と暮らせば』同様に、とりわけ女主人公が際立って魅力的だ。今回は、戦時下につましく熱く恋する乙女を原田知世が印象深く演じている。

1945年の春、敗戦間近な鹿児島県の田舎町の話である。両親を喪った紙屋悦子（原田）は、優しい兄・安忠（小林薫）と女学校の同級生だったその妻・ふさ（本上まなみ）と身を寄せ合うように暮らしていた。悦子は心ひそかに兄の後輩で海軍航空隊に所属する明石少尉（松岡俊介）に思いを寄せていたが、そんな彼女の気持を知ってか知らずか、兄は明石とは別の青年との見合いを勧める。その相手とは、こともあろうに明石の親友・長与少尉（永瀬正敏）で、明石自身もこの縁談には乗り気だという。傷心を押し隠し、見合いを受け入れる悦子だった。

ところが、明石が長与を連れて紙屋家にやってくると、家には誰もおらず、茶の間のちゃぶ台の上には、出来立てのおはぎだけが人待ち顔で(?)大皿に盛られていた…と、冒頭から数分間の描写でもう当時の日本の地方の暮らしが手に取るように伝わってくる。貧しくとも小ざっぱりとした家周り、鍵など掛けてない格子戸の玄関、靴を揃えて勝手に上がり込んで茶の間で待つ客人。大切なお客の歓迎のために大きな釜で炊いたもち米と小豆で作った甘すぎないおはぎ。戦時中というよりは、昭和そのもの、といった雰囲気である。

兄夫婦は急用のため不在で、明石が早々に帰った後は長与と悦子の本人同士だけの見合いになる。悦子の記憶にはないが、長与は悦子に一度会ったことがあり、それ以来一途に思いを募らせ

ており、極めて不器用ながら、悦子にありったけの心の内を伝えようとする。複雑な思いの悦子だが、長与の気持は素直に嬉しく温かく胸に染みてくる。どんなことがあってもあなたを一人にはさせない、と訥々と語りかける長与に「はい」とうなづく悦子だった。

ほどなく、紙屋家に明石があいさつに訪れる。特攻隊に志願し、既に出撃の時が迫っているというのだ。明石は自分にとっても最愛の悦子を親友の手に託そうとしたのか。「長与はほんなこつ、よい奴ですけん」と言い残し、庭先の満開の桜の木の下を去っていく後姿を見送る悦子。早く追いかけて！と義姉は急かすが、追いつがったとどうなるものか。明石の去った後、激しく号泣する悦子。それが永遠の別れだった。

数日後、悲痛な表情で明石の戦死を告げに来た長与が、出撃直前、明石から預かったという一通の手紙を悦子に渡す。開封せぬままに手紙を握り締めながら、悦子は長与にきっぱりと呼び掛ける。「待ちよいますから…日本がどげなことになっても、ここで待ちよいますから」「はい」「きつと迎えに来てください」「はい」…。

「はい」という言葉が、これほどに重く熱く心を込めて発せられた例を知らない。この原作（戯曲）は、本作の脚本も担当した松田正隆の両親をモデルに書かれたという。数知れぬ無残な悲劇をもたらした戦争だが、その陰にはまた、こうした珠玉の愛の物語を育んでもいた。原田と永瀬が初々しく扮する、共白髪で健在の現在の二人の姿。戦後60年ならではの、もう一つの“戦争と人間”映画と言えるだろう。



日本映画(113分) / 黒木和雄監督

### 『紙屋悦子の青春』

8月12日より岩波ホール(東京)にて公開

